

学 校 衛 生 統 計

28. 昭和29年度学校衛生統計調査

資 料： 県総務部統計課

調 査 の 概 要

この調査は、学校身体検査規程により毎年4月中に学校が行う幼児、児童、生徒の身体検査および教員の身体検査の結果に基づき次の事項を調査する。

1. 生徒、児童および幼児の発育（身長、体重、胸囲、坐高）ならびに健康状態（疾病および異常）
2. 生徒、児童および幼児の事由別身体検査不受検者数
3. 教員の健康状態（結核）

抽 出 方 法

昭和29年4月1日現在の県下の各学校を市部、郡部（行政区画による）の2つの層に分類し、更に市部、郡部のそれぞれを学校規模（児童、生徒数による）により2つの層に分類し、文部省の指示する小学校8100、中学校12400、高等学校（通常定時をそれぞれ独立校とする）40の率で任意抽出して決定するのである。

調 査 の 結 果 に つ い て

1. 教 育 状 況

先づ身長、体重、胸囲、坐高を28表により男女の発育を比較してみると、身長においては、年齢の進むにつれて直線的な上昇を示しており、9才～12才は1年ごとに男女共に5.0種内外の発育振りで、12才～15才においては男子は6.0種と急激な上昇をなし、17才頃から横ばい状態となるが、一方女子は12才頃一時男子を凌駕する発育を示し次第に上昇が緩慢となり、15才頃から停止の状態となる。

体重については男女共に弓形状の上昇を示し11才～15才にかけての発育の度合が著しく見受けられるが、この時代は女子が男子より一時的にまさり、殊に13才においては男子より1.7種の大きな差が見られる。

胸囲においては11才までは女子が相当に劣っているが、12才～14才では男子を上廻り、殊に12才で1.0種大きくかけ離れるが、15才以後は男子の発育におよばない。

坐高については身長と同様な傾向が見受けられる。

次に29表により昭和23年より各年次別に発育の推移をみると各年共に順次上昇を示し、身長、体重においてそれが著しく、続いて胸囲、坐高となつている。この動向を詳細に検討することは困難であるが、戦時中から戦後にかけて著しく悪化した経済状態時に食糧事情によつて低下していた体位も経済状態が漸次落着き食糧事情の好転、教育方針の改革等により学校、家庭共に保健施設、条件の充実したことに起因すると思われる。

また、第30表により環境別に発育をみると種々の環境に起因してか身長においては男女共に郡部より市部が上廻っているが、体重は逆現象を示し、胸囲、坐高は共に身長と同様な傾向がある。最も発育の旺盛な中学校時代は反対現象が見受けられるのは最も注目すべき事象である。

次に本県の体位は第31表に示すとおり全国平均と比較すると、小学校時代は発育が男女共に全国よりまさっているが、中学校時代になると身長のみが男女共にまさり体重、胸囲は女子が劣り、坐高で女子のみがまさっている。高等学校においては坐高以外は劣っているうち定時制より通常制が全国平均より劣っているのは注目すべき点で、これらを総合して全国平均より大して劣っていないが、樂觀は出来ない現状で、この点関係者に課せられた今後の問題となろう。

2. 健 康 状 態（疾病異常）

疾病異常の結果を見る場合注意すべき点はその該当者率が受検人員に対する割合であるから、検査を受けなかつた

場合は調査の対象より除外されているから、それぞれの調査事項について全員でないことである。

先づ第32表より学校種別に疾病異常を見ると、幼稚園より小学校へと順次増加していくものは、近視、むし歯の処置を完了している者、その他の歯疾、ツ反応の既陽性、ツ反応の陽転であり、逆に幼稚園に多く漸次減少するものは胸部異常、伝染性の皮膚疾患、むし歯の未処置歯のある者、ツ反応の陰性である。小学校に目立つて多く見受けられるものはトラホーム、その他の眼疾、せん様増殖症、身体虚弱、その他の疾患および異常、ツ反応の陽転、寄生虫卵保有、要養護であり、また中学校に多く見受けられるものは蓄のう症、ツ反応の疑陽性、寄生虫病である。また性別に見ると男子に多いのはせき柱異常、胸部異常、遠視、色覚異常、蓄のう症、ツ反応の陰性で、女子に多く見受けられるのは近視、むし歯の未処置歯のある者、呼吸器系の結核、ツ反応の既陽性である。

次に主な疾病異常を見ると近視は小学校において市部より郡部が男女共に多く、女子が市部、郡部共に男子より多い。また中学校では市部において男子が圧倒的に多く、郡部は女子が多く特に女子の郡部は遙かに凌駕している。高等学校においては市部、郡部共に女子が多く、男女共に郡部より市部が多い。トラホームは幼稚園において男女共に市部が多く、小学校では市部が郡部より遙かに多く、中学校では女子において市部より郡部が多くみられ、高等学校においては市部、郡部共に女子が劣っている。次に寄生虫卵保有は男女共に市部より郡部が、また、市部、郡部共に女子が男子より凌駕しておるが、高等学校の市部のみが反対の現象であるのは注目すべきである。またツベルクリン皮内反応においては幼稚園より小学校、中学校、高等学校へと陰性から陽性に急激な増加をして行く状況が見られる。

3. 身体検査不受検者数

この調査は抽出調査の方法によつて行われているので、結果表を見る場合特に受検率が問題となる。そこで第34表により事由別不受検者率は「病氣による」理由より「その他の理由」による方が遙かに多く、市部より郡部が、また男子より女子が總体的に多く、特に中学校および高等学校においては男女共に多く、前者は家事の都合等による長期欠席生徒が多いとみなされ、後者は勤労学生として職場の都合等による欠席が多いのに起因していると思われる。

4. 教員の健康状態（結核）

結核患者総数の教員総数に対する割合を第7表で見ると、学校種別では小学校が全教員の5.6%、中学校5.9%、高等学校の通常制が5.1%となり、男女別では小学校の男子が最も多く6.7%を占め、ついで中学校の男子、高等学校の通常制女子が5.9%となつている。なおこれらの結核患者のうち休職しているものは中学校が最も多く、結核り患者の67%を占め、ついで高等学校が64%、小学校57%となつている。

参 考 「分散」について

ある事象の度数分布から平均値が得られたが、その平均値が如何なる型の分布から得られたものかは平均値だけをもつてしては推察することは不可能である。例えば各単位が平均値のまわりに集中しているものか、平均値の前後にまばらに撒ばつている分布かは見当がつかない。これがため分散を算出して分布の撒ばりの程度を測るに用いられる。しかし集団単位の偏差の代表値と考えることは、それが平方数であるがために不可能である。そこでこの分散の平方根を取つて分布の撒ばりの度合を測る量とする、すなわち標準偏差である。標準偏差が大なる分布では、その各単位は平均値の前後に疎に撒ばり、標準偏差が小なる分布では各単位は平均値のまわりに密に集合しているといひ得る。その疎密の程度を計量化する値が標準偏差である。標準偏差の自乗が分散である。